新發見の師秀說草に就て

石橋誠道

昨年の夏余は宗寶調査の下調の爲に萬無上人の傳法譜脈を調査すべく鹿谷法然院に出頭した。その時住職萬里小路麟雄氏は快く余を引見し上人の譜脈を盡く余に示さるゝと共に更らに一本を持ち來て余に示し、この書は恐くは忍澂上人の御所持の本であると思はるゝが「師秀說草」と書いてある、然し從來餘りにその名を聞かないが如何なる書物であるかと尋ねられたので、卷を開いて一見した所これは恐くは逆修說法の異本であることに氣が附いた。仍て暫く借用して歸り淨全所收の逆修說法と比較するに、相違する點甚だ多く最も古體を存する異本であることが明白となつたしかもこの書は望西樓了惠が漢語燈錄の中の逆修說法の跋語に於て「此の錄二本あり或は眞字あり或は假字あり、未だ何れか正しきを知らず、今且らく眞字の本に就て之を集むる者なり」と言つておる假字本で、望西は見たけれども收錄しなかつた本である。それが今尙ほ傳つて保存されたといふことは眞に珍らしいことであり、誠に得難き珍本である。然るに安土の淨嚴院にある無緣集(大正十四年八月宗寶指定)も亦た逆修說法の假字本であることを思ひ起して借用して比較して見ると、其の內容が全く一致し一言一句更らに異ることなきを知つて一層嬉しく思はれた。但し安土の無緣集は足利時代の古寫本で、紙質も裝幀も立派ではあるが、最後の奧書にやゝ缺くる所がある。然るにこの師秀說草はより完全に奧書が示されてあるから、その缺點を補ふべく更らに一段の興味ある實に貴重な本である。而し

て本書の詳細を述るに先き立つてまづ本書の起草の原因、その年代等に就て暫く考へて見たいと思う。

一、本書の起草

逆修説法は安樂房遵西の父外記大夫師秀が法然上人を導師と仰ぎ吉水の禪室に於て七七日間逆修の法會を修せられた時、法然上人が毎日淨土三部經の講義を遊されたその説法の聞書である。而してそれを記錄した人の姓名は解らないが、師秀説草の奥書には「或人聞二書之一畢」と記されてあるから、その席にあつた誰れ人かが、それを記錄したものであることは確かである。然るに上人はその中始の六七日間導師を勤め給ひ最後の第七の七日は眞觀房感西が上人に代つて導師を勤め説法をしたのであつた。故に師秀説草の奥書には下の如くに記されてある。

外記大夫師秀ハ安樂房之父也、於ニ吉水法然上人之房一ニ五十箇日逆修之七日々々ノ導師ハ法然上人也、但シ第七座ハ眞觀爲ニ代テ勤レ之ヲ、或人聞ニ書之ヲ一畢ヌ

この記事に依るに最後の七日は眞觀が代勤したことは明かである。故に勅傳の四十八の卷眞觀房の傳には左の如く記されてある。

眞觀房感西は十九歳にて始て上人の門室に入る。師とし事へて法要を咨詢すること多くの年なり。選擇を草せられけるにもこの人を執筆とせられけり。又外記の大夫逆修を營み上人を請し奉りて唱導とす、上人一日を讓りて眞觀房に勤めさせられき、器用無下にはあらざりけり、然るを上人に先き立ちて正治二年閏二月六日生年四十八にて往生を遂ぐと。

即ち師秀の逆修說法は上人と眞觀房とに因て完了されたことは明らかであるが、漢語燈錄の中の逆修說法には初の六七日間の說法即ち法然上人の說法のみを收錄して、最後の第七七日說法即ち眞觀房の分は略されてある。これ蓋し語燈錄は法然上人の著述法語等のみを蒐集したものであるから、眞觀房の說法は特に之を省いたのである。然るに師秀說草並に無緣集にはこの眞觀房の說法をも收錄されてあることは洵に喜ばしいことである。而して本書の內容は大經・觀經・阿彌陀經・善導の觀經の疏・五祖の像等の要義を簡明に說明したもので、宗祖の三部經釋・選擇集等に次いで最も重要な說話であることは大いに注意すべきである。

二、本書記錄の年代

本書記錄の年代は何處にも記述してないが、第四七七日の說法の中に「眞言云云乃至如二選擇一」とか、或は「讀誦大乘者如二選擇一」等と云ひ、又第五七日の說法にも「道綽三罪乃至如二選擇一」と言はれてあるから選擇集の撰述よりも後であることは確かである。即ち選擇集は建久九年上人六十六歲の時の撰述である故に、逆修說法はそれよりも後であることは明かである。然るに又眞觀房感西は前記の如く正治二年二月六日に示寂されたから逆修說法はそれよりも前であつたことは當然である。然るに選擇集撰述の年代に就ては種々の異說が傳へられてあるが、大體に於て建久九年といふ說が最も有力である。所が建久九年として又その年の何月何日に成功し、又關白兼實公にそれを何時進呈せられたかは不明であるが、勅傳第十一卷に依れば「この書(選擇集)を選進せられて後同年五月一日上人の夢の中に善導和尙來應して、汝專修念佛を弘通する故に殊更らに來れりと示し給ふ、この書冥慮にかなへること知りぬべし、深く信

受するに足れり」と云ふ文があるから、少くともこの年の五月以前に撰述し給ふたことは明かである。然れば本書の聞書は建久九年の五月から正治二年の二月まで(建久十年四月改元して正治と云ふ)即ち上人が六十六歳の五月から六十八歳の二月まで、僅かに一年と十箇月の間であつたことが明らかである。越智專明氏の淨土宗年譜には建久五年の出來事とされてあるが、恐くは何等かの誤であらう。

三、安樂房並に其父師秀の事績

安樂房遵西は法然上人の數多き門弟の中でも最も熱烈なる信念を有した最も有名な門弟である。即ち選擇集の撰述の際はその執筆者として有名であり。鹿谷の別時念佛禮讃に就ては御所の女房出家の事件で有名であり、建永二年の法難の時は泰然自若として死刑を受けて有名である。愚管鈔の說に依るに安樂房はもと泰時入道の侍であつたが、後に入道して念佛の行者となつたと言はれてある。又石垣の金光房が念佛に歸入した原因は全く安樂房の教化の力であると云ふことが御傳翼賛遺事に記されてある。即ち石垣の金光上人は筑後に生れて台嶺に學び、石垣の事務を司つてゐられたから、世人稱して石垣の金光房と呼びなした。然るに所領の沙汰に就て、相州鎌倉に至つて訴訟をしたが、意ならずして數日を送つた。時恰かも法然上人の門弟安樂房が鎌倉に下向して念佛を宣傳した際で、貴賤男女が踵を接して教を受けた。然るに偶ま澁谷七郎入道道辨なる者が、石川の自宅に安樂房を請待して一向專修の教訓を受け、特に金光房を招いて法話の記錄をなすべく依賴した。然るに金光房はこの因緣から、宿善忽ち開發して遂に淨土の教に歸入し、直ちに訴訟を中止して、速かに吉水の禪室に詣でゝ、念佛の奥義を聽聞し、遂に奥州一圓を教化し、最も

偉大な功績を遺すに至つた。かくの如く安樂房は、燃ゆるが如き信念を持ち、教化の力も強かつたから、その父である師秀が、最も上人の歸依者であり、淨土教の信仰者であつたことも容易に了解が出來るのである。されば師秀が生存中に逆修の法會を營んで、特に法然上人を導師と仰ぎ奉つたことも、亦た偶然ではないと思う。而して師秀の詳細は、之を知ることは出來ないが、今その知り得る範圍に於て、一言こゝに記しておけば、翼賛第五十四卷に云く、師秀の行跡は未だ詳かならず、父師茂は上北面穀倉院の別當大外記にて正四位上に叙する事系圖に見へたり。一書には中原の師光は中原の祖勝良より十九代師秀が子なりと。

勝良(從五位下太宰少貳)—春宗—有宗—致時—師任—師平—師遠—師文—師尙—師重—師兼—師顯—師古—

—師茂—師夏(大外記)
　　—師秀—安樂房邊西

然しながら今この翼賛の系圖に依れば師光は十六代に相當する譯で十九代ではないが、若し眞に十九代とすればその間に脫落がある譯である。兎も角相當の家柄であつたことは確かである。

四、本書の名稱及び異本

本書は種々の名稱に依て傳へられてある。今その名を列擧すれば左の如し

一、逆修說法(古本漢語燈錄並に新本漢語燈錄所收本)

二、師秀說草(京都鹿谷法然院所藏本)

三、無　緣　集（安土淨嚴院所藏本）
四、外記大夫入道五十日逆修說法詞（決疑鈔四・東宗要四）
五、祖　師　說　草（草の誤か）（往生要集六）
六、外記入道說章（直牒六）
七、師　秀　草（淨土述聞口決鈔下）
八、外記入道說法單（草の誤か）詞（選擇集大澤見聞二末）
九、法然聖人御說法事（西方指南抄上卷）

斯樣に本書が種々の名稱に依て傳へられたのは固より一定の名稱なく、師秀の逆修の時の說法の詞といふやうな意味で斯く稱へられたものであらう。

次に本書の異本に就て少し述べたいと思う。本書には凡そ五本がある。卽ち古本漢語燈錄所收本、新本漢語燈錄所收本、鹿谷法然院の師秀說草、安土淨嚴院の無緣集、親鸞の西方指南鈔の中の法然聖人御說法事等である。この中始の二本は漢語であり、後の三本は假字本である。これら五本の內容は殆んど一致してゐるが、その修辭に至つては何れも多少の異りがある。但し後の三本の中前の二本は漢文交りの假名文であり、後の一本は片假名交りの假名文である。

而して今この下に於て漢語燈錄に新古兩本ある理由を一言加へておきたいと思う。この兩本を比較對照する時に、その內容には大差はないが字句修辭等に至つては、新本は頗る修正されてあることは覆ふ可らざる事實である。而し

て古本は最も原始的であり、新本は頗る後世の修正であることも又明白である。この新本が世間に行はるゝに至つた經路は新本漢語燈錄の跋文に左の如くに記されてある。

始め知恩院の第四十二世白譽秀道上人が二三の漢語燈錄の寫本を披讀された所が、何れも魚魯倒置の誤、遺字闌脫等があつて宗祖の尋常の法語に異り、宗義に矛盾した所もあるので種々の疑問がどうしても解けなかつた。所が曾て上人が諸國を遊歷された際、伊豆の國藥王山寺に於て武州金澤文庫の藏本のあつた事を思ひ出して、弟子某に命じて借用せしめ、其の本を開いて熟讀されて始めて前の疑雲が晴れた。依て義山上人に命じて其の善本に依て對校訂正せしめられたのが卽ち新本漢語燈錄である。所がその金澤文庫の藏本といふのは鏑木光明寺の良求上人の校訂本であつて、その跋文に下の如くに記されてある。

建武四年七月、得二了慧上人所レ集語燈錄草本十八卷一、從二其初冬一至二臘月二十五日一、與二同門老宿四五輩一治二定之一畢、更寫二一本一藏二武州金澤稱名寺文庫一者也

下總州鏑木光明寺　良　求

良求上人の事蹟は明了には解らないが、建武といふ早き時代に於て校訂して金澤文庫に藏められたとすれば、頗る善本と言はねばならぬ、故に義山上人はその本に依て校正されたのであつた。然るに眞宗教典志の著者玄智は之を攻擊し、毒舌を以て痛く之を罵倒してゐる。卽ち教典志の一卷に、

黑谷上人語燈錄十卷は文永十一年甲戌十二月、鎭西の了慧が、源空上人の著述諸章を編集す。此に新古の兩本あり古本は寫傳して現に京の小川の西福寺に在り、傳持由序は往生要集釋卷尾に之を記すが如し、新本は寶永二年乙酉

三月、知恩院の白譽至心その徒義山をして之を校刻せしむ、刪補縱横殆んど舊制を失す、古本及び諸の舊籍に載する所の諸文を以て之を對檢するに、則ち損益する所知るべきなり、且らく七條　請文の如き、吉水の親書現に二尊院にあり、摸刻世に傳子、古德傳五、指南鈔中末、十卷傳六、舜昌傳廿九等に載する所幷に彼の摸刻文と同じ。而るにこの錄の第十九に載する所は獨り差異あり。中略、諸の消息を載するに至つては、尊公・閣下・賢旨・貴問・芳書を領す・道情を審かにす等の言あり、宛然今時の尺牘家の語なり、豈に是れ吉水の著す所ならんや、斧鑿の痕、昭晰として見る可し、至心の跋に乃ち豆州藥王山寺に於て、武州金澤の藏本を得て之を刻すと曰つて、而して刪修の跡を掩はんと欲す、亦た陋ならずや、中略、惜いかな吉水居多の遺文、一たび鎭徒の手を經て空しく鎭家の私書となり了んぬ。復た吉水の書にあらざるなり。

と記されてある。然しながら玄智の批評は決して當を得たものではない、唯だ參考の爲に記しておく。但し義山が宗祖の著述を出版するに際して字句に修正を加へた事實は選擇集等に於ても明かであるから、本書も亦た多少の修正を加へたことは勿論である。

第一、古本漢語燈錄所收本

中外出版株式會社から出版された古本漢語燈錄は、故大正大學教授今岡達音氏が曾て東京本鄕の集古堂で發見されたものを底本としたのであるが、その中に收めてある逆修說法の奧書には傳來の記事が左の如くに記されてある。

右六ケ條是外記禪門安樂房遵西父也修二五十日逆修一之時、以二上人一爲二先六會導師一、彼說法聞書也、結願唱導眞觀房也、故且略レ之、但集二多本一或有二眞字一或有二假字一未レ知二何正一、今且就二眞字本一集レ之、須レ尋二正本一焉

本云、嘉元四年八月五日、以二蓮華堂正本一書寫了、覺唱

寫本云、永德癸亥五九日、於二三光院北坊一、令レ書畢、吉水末流導見

時也嘉慶戊辰八月廿七日、於二忌部道場觀音寺一書寫畢、快尊

右此錄者古本從二來迎寺一令二息借一、奉レ寫二書之一矣

願遠傳二末代一、廣及二諸人一、自他同生二極樂世界一、必披二見之一貴賤、奉レ仰二十念之廻向一者也

于時明應元年十二月一日、南無阿彌陀佛圓空和尙

于時明應五年卯月廿六日、書寫畢　筆者云云

第八卷紙數三十二張

元祿十一年寅九月五日、校二合此卷一竟、所持惠空

以上は古本の逆修說法の奧書であるが、中外出版會社から出版した古本漢語燈錄の終を見るに、この錄は圓空和尙が寫されたものが、和州三輪に傳はつたのを、義山が借用してそれを寫し、更らに二尊院所藏の本と對校した善本に依て、眞宗大谷派の初代の講師惠空得岸が寫し取つたものである。

第二、新本漢語燈錄所收本

新本漢語錄に收むる所の逆修說法は、前にも辯じた如く字句修辭等は古本と大いに異つてをる。が然しその內容には大差はない。その奧書は古本の如く傳來の奧書は記されないが、卷末に望西が書き添へた奧書を示せば左の如くである

右說法六條者、外記禪門安樂房遵西父也修二七七日逆修一之時、乃以二上人一爲二前六會導師一、是其隨聞記也、結願唱導眞觀

勤レ之故今略レ之、但此錄有二二本一或有二眞字一或有二假字一、未レ知二何正一今且就二眞字一集レ之者也

今この奥書に就て新古兩本を對校するに、新本はやゝ訂正が加へられてあることは明かであり、又古本の最も原始的であることも自ら了解さるると思う。

第三、鹿谷本師秀説草

此本は竪九寸五分横六寸三分、袋綴、楮紙、五拾九枚である。表紙には草書を以て師秀説草と書し、内表紙には顯書を以て師秀説草と書す。本文の書體は行書で漢文交りの假字文である。卷の始には師秀説草といふ標題なく、卷尾に至つて尾題としてそれが記されてある。その本文の終り尾題の前後には左の奥書が記されてある。

外記大夫師秀、安樂房之父也

於二吉水法然上人之房一、五十ケ日逆修之七日々々導師法然上人也、但第七座眞觀爲代勤レ之、或人聞二書之一畢。

師秀説草(尾題)

右於二下總州豐田庄水飼戸鄕開元之村一、客二食祐福寺一日、爲二超蓮社月公和尙一書二寫之一、偏想二舊識一不レ顧二人嘲一染二禿毫一而已、乞願稱名十念。

文明十七天乙巳霜月四日　沙門惠月筆

法然上人御談師秀安樂房父、逆修七々説相也。此草述聞鈔引レ之。

白旗沙門　叡譽門悅

心譽祐峯

貞享四年丁卯正月廿五日、爲二報恩一書寫竟

讀二要集記一云二祖師說草一者是也（原本には送り假名なし）

證譽雲臥書

以上は本書の奥書であるが、是に依て門悅祐峯等の傳寫本に依り、增上寺の第三十四世證譽雲臥大僧正が筆寫された本であることは明らかである。而してこの奥書の中「於二吉水法然上人之房一」と云ふ文は他の本には全く記されないもので、逆修の場所を知る上に於て大に參考となるものである。かつ又その文も最も原始的である。而して安土の無緣集には「外記大夫師秀安樂房之父也」より以下は全くないのに是の本は、かの奥書があつてその意味が漢語の逆修說法の望西の奥書とも一致して大に參考となるものである。更らに考ふべき事は漢語の逆修說法は望西自らの奥書であるのに、本書の奥書は、師秀說草の記錄者自らの奥書と思はるゝ事である。而して叡譽門悅は廓山の門弟で初め館林の善導寺に住し、後に傳通院に昇進した人であり、心譽祐察は門悅の弟子で、河越の蓮馨寺に住職した人である。而して本書が果して雲臥大僧正の親書であるか、或は大僧正の書寫本を誰れかが轉寫したものか、それはいさゝか問題であるが書風も最も達筆であり、雲臥僧正と忍澂上人とは最も親懇の間であつたから、恐くは僧正の親筆を上人に讓られたものと思ふ。更に僧正の他の筆蹟と比較研究することに依て、一層明らかになる譯であるが、それは他日の研究にまつことゝする。

第四、安土本無緣集

この本は竪八寸四分、横五寸貳分、楮紙、袋綴、六拾參紙である。書體は行草で極めて達筆である。筆寫の年代は記さ

れないがその紙質書風等から考へて足利中期を下らないと思う。表紙は紗地金襴で菊の花を顯はし、その中央の題簽紙に無縁集と書いてある。上下表紙の裏面并に其の本の三方の縁は皆な金箔がおかれてある。帙は龍や狂ひ獅子の模様を織り出した遠州好の緞子で作られてある。文章は全部漢文交りの假字文で望西の謂ゆる假字本であり、先きの師秀説草と全く一致する。但しこの本は「七七日結願、佛並勢至菩薩　經雙卷經阿彌陀經」と云ふ章節の標題の下に「此七七日之啓白ハアミタ經、勢觀上人所役と云へり」と注されてあるので、伊藤祐晃氏の淨土宗史の研究上卷には「傳ふる所によればこの逆修は建久五年のことなれば勢觀房十二歳の時のことなり、勢觀の所役とは考へられず、恐くはこの筆者は眞觀と勢觀とを誤り傳へたるものなり」と言はれてあるが、それは誠に首肯さるゝ説である。但し伊藤氏が逆修説法を建久五年と定められたのはそも何れの書に依られたものか、或は越智氏の淨土宗年譜の説を用ひられたのではあるまいか、若し然ればそれは誤りであると思う。何故なれば逆修説法の中には「如二選擇集一」と云ふ句が往々に使はれてあるから、少くとも選擇集撰述の年卽ち建久九年以後の出來事と見なければならないからである。而して師秀説草にはその注が記されてない。然しその注に相當するものが最後に奥書として記されてある。本書は卷首にも全く標題なく唯だ最後に「外記大夫師秀安樂房之父也」と記されてあるのみである。又本書と師秀説草との文章が全く同一である點から考へてこの兩書の原本は同一系統のものであつたことは確かであるが、然し本書には奥書がなく、その奥書に相當する記事が第七七日結願の下に記されてあることから考へて、同一系統の異本に依て書かれたものと推定することが出來る。而して又一面からは第七七日の標題の下に「眞觀房の所役」と記して、それを奥書として記さない方が、却つて原始的であるといふ考へ方もあるかも知らないが、それは暫く問題としておく。更らに一言を添へたいことは、

師秀說草幷に無緣集には、第五七日の章節の標題の上に「外記大夫師秀逆修五七日」と記されてあるのに、古本幷に新本漢語燈錄の中の逆修說法には、「外記大夫師秀逆修」の八字が略されて「唯だ第五七日」と書かれてある。

第五、法然聖人御說法事

本書は眞宗の親鸞上人の作と稱する西方指南鈔上卷に收められたもので、其內容を檢するに全く師秀說草と一致する。但し說法の全體を記さず、要所要所を抄出して其他は多く省略されてある。又初七日、二七日等の章節の標題も略されてある。然しながら抄出された文章は全く師秀說草と一致して少しの異もないことは大に注目に價する。但し本書も第六七日の說法の終までを記し、第七七日の分は全く記されてない。これ蓋しかの望西の逆修說法と同樣に法然上人の說法といふ點から、眞觀房の分は省略されたのであらう。而して本書は二卷に分れ上卷は親鸞聖人が、康元元年丙辰十月十三日八十四歲の時之を書き、下卷は康元二年丁巳正月一日八十五歲の時に書かれたことが記されてある。斯樣に師秀說草が親鸞聖人の書寫本と符合することは洵に興味ある事柄で、彌よかの草の價値を高むる所以である。

五、異本の比較

以上現存の五種の異本の大要を述べたが、今この下に於て各種異本の相違を示し一目瞭然たらしむるであらう。

（古本漢語燈錄の中の逆修說法）

逆修說法第十一　自初七日至三七日

第一七日三尺立像、阿彌陀雙卷經阿彌陀經々說、之中ニ說ニ佛、功德ヲ有ニ無量身一、或ハ總ノ說キ一身ヲ一或ハ別ノ說キ二身ヲ一或說キ三身ヲ一或ハ說ク四身ヲ一乃至華嚴經ニハ說ケリ十身、功德ヲ今且ク以テ眞身化身之二身ヲ一奉レ讚ニ嘆シ彌陀之功德ヲ一

（新本漢語燈錄の中の逆修說法）

逆修說法第十　自初七日至三七日

某者ナル彫ノ刻ニ三尺、阿彌陀佛引接、形像ヲ而作ス七七日預修、佛事ヲ一應シテ彼、固請ニ慶讚說法ス觀レハ夫レ雙卷阿彌陀等、經及諸論之中說ニ佛功德ヲ有ニ無量身一或說ニ一身ヲ一或ハ說キ二身ヲ一或ハ說キ三身ヲ一或ハ說キ四身ヲ一乃至華嚴經ニハ說ケリ十身功

（師秀說草）

逆修初七日彌陀來迎像三尺　大經小經　初七日佛三尺立像　經雙卷經阿彌陀經

法則如レ常

導師法然上人經論、中ニ佛之功德ヲ說クニ無量、身アリ或ハ總ノ一身ヲ說キ或ハ二身ヲ說キ或ハ三身ヲ說キ或ハ四身ヲ說ク乃至華嚴經ニハ十身、功德ヲ說ケリ今且ク眞身ト化身トヲ以テ彌陀如

（無緣集）

逆修初七日彌陀來迎像三尺　大經小經　初七日佛三尺立像　經雙卷經彌陀經

法則如レ常

導師法然上人經論、中ニ佛之功德ヲ說クニ無量、身アリ或ハ總ノ一身ヲ說キ或ハ二身ヲ說キ或ハ三身ヲ說キ或ハ四身ヲ說ク乃至華嚴經ニハ十身、功德ヲ說ケリ今且ク眞身ト化身トヲ以テ彌陀如

（法然上人御說法事）

經論ノ中ニ佛ノ功德ヲトケルニ無量ノ身アリアルヒハ總シテ一身ヲトキアルヒハ二身ヲトキアルヒハ三身ヲトキ乃至華嚴經ニハ十身ノ功德ヲトケリイマ且ク眞身化身ノ二身ヲモテ彌陀ノ功德ヲ讚嘆シ

以上は最初の部分を比較したのであるが次に第六七日説法の最後の部分を比較對照して參考に供したいと思う。

（古本逆修説法）

然者不レ可下捨二百即百生之専修一而執中千中無一之雑行上唯一向修二念佛一可レ捨二雑行一也是則此経大意也望佛本願意在衆生一向専稱彌陀佛名云云返々仰テ二本願一可二念佛一也仰願云云

（新本逆修説法）

但使ル二専レ意ヲ作一者ハ十ハ即チ十生ス雑フルレ修ヲ不至心ノ者ハカ千中ニ無シレ一モ前文ニハ雖レ許ス二千中五三一後ノ文ニハ則曰ク見二聞諸方一千ノ中ニ無シ一モ導師ノ在世已ニ爾リ何況今時時機共ニ衰ルラヤ豈捨テ二百即百生ノ専修一可レ修二千中無一ノ雑行一乎行者善ク自ラ思量スヘシ

（師秀説草）

然者百即百生ノ専修ヲ捨テ、千中無一ノ雑行ヲ執スヘカラス但一向ニ念佛ヲ修ノ雑行ヲ可レ捨也此即此経大意也望佛本願意在衆生一向専稱彌陀佛名云云返々本願ヲ仰テ可二念佛一也仰願云云

（無縁集）

然者百即百生ノ専修ヲ捨テ、千中無一ノ雑行ヲ執スヘカラス但一向ニ念佛ヲ修ノ雑行ヲ可レ捨也此即此経大意也望佛本願意在衆生一向専稱彌陀佛名云云返々本願ヲ仰テ可二念佛一也仰願云云

（法然聖人御説法事）

シカレバ百即百生ノ専修ヲステヽ千中無一ノ雑行ヲ執スヘカラス唯一向ニ念佛ヲ修シテ雑行ヲスツベキナリコレスナハチコノ経ノ大意也望ル二佛本願一意在シル衆生ヲ一向専稱ル二彌陀佛ノ名一ト云リ返々モ本願ヲアヲキテ念佛ヲ修スベキ也ト

右五本對照に依て新本逆修說法が最も多く修正されてあることを知ると同時に、又古本が如何に原始的價値あるかを認むることが出來るであらう。更らに古本の逆修說法を師秀說草と比較するに一層原始的價値を有するものと考へる。何となれば鎌倉時代は記錄幷に消息文等は漢文交りの和文が多く行はれたから逆修說法を記錄するには、この方法が最も自然であつたと思ふ。然し世間に公にするには漢文尊重の風習に應じて字句に修正を加ふることも又決して無理からぬことである。この意味に於て望西は特に漢文の逆修說法を採用して語燈錄の中に入れたものであらう。故に古本の奧書に「但集二多本一或有二眞字一或有二假字一未レ知二何正一、今且就二眞字本一集レ之、須レ尋二正本一焉」と斷り書きをしておいたのである。特に漢語本の奧書は筆者自身の奧書ではなくて、あれは望西の奧書である。然るに師秀說草の奧書は筆者自らその奧書をしたものであるが、自らその名を表はすことを遠慮して「或人聞二書之一畢」と記したものかと思はれる。これらの點から考へて本書は最も貴重な文書と言はねばならぬ。惟ふに宗祖入滅の後、七百有餘年の今に於て、しかも望西が採り殘した假字本の逆修說法が法然院から發見されたことは、誠に貴いことであり、大に喜ぶべきことで、安土所藏の無緣集と共に大に尊重すべきものである。故にこゝに一文を草して以て紹介したのである。